

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

The Diary of Hisakatsu Hijikata (I)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-07-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 土方, 久功 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001075

土方久功日記 第3冊

1923年4月9日～7月10日（大正12年）

解 説

この第3冊の表紙には、「四月九日より」と記されているが、日記は4月10日から始まっている（第2冊は、4月8日で終わっている）。

久功は、4月10日の夜行列車で東京を立ち、翌11日の10時20分に京都へ着いた。25日まで、美術学校の修学旅行で、京都・奈良の寺社を探訪した。久功は、他の学生達より一日早く関西へ入り、修学旅行終了後も、関西にとどまり、2週間、京都・奈良・滋賀を訪ねた。

関西から戻って間もない5月15日、久功は、独逸表現派展を見た。ペヒシュタイン、ウィルドの木彫、カンディンスキーの版画など、良いものがあったという。

5月22日、長く患っていた、美術学校の同級生の野間政治が死去した。「これで四人目だ。自分の親しくして居る友は、みんな死んで了ふ!」と日記に書いた。

5月25・26日の両日、松方正義が外国から買い戻してきた錦絵の展覧会を見た。興味ある作品が数多くあったが、ことに、写楽に惹かれた。

6月7日、学習院の同級生、石黒九十九が渡欧するので、その送別会の招待状が届いた。12日の夜、東京會館で開かれるが、久功は、6円80銭の会費が払えず、出席を諦めた。惨めな気持ちになり、それは、暫く引き摺ることになる（結局、送別会は、高い会費のためか、参加者が集まらずに中止になり、かわりに芝の三緑亭でささやかに開かれた。久功も、この会合に、遅れて出席した）。

7月8日、目白の佐伯祐三のところに行き、2時間も話し込んだ。「佐伯と二人で二時間も喋ったことは始めてだったけれども、自分は少しも退屈しなかった。」と日記に書いた。

[3 千九百二十三年四月九日より 同年七月十日迄

大正 12

①

[表紙裏]
[今は亡い 懐しい父上に 功]

[見返し]
[×を附したるものは、別に原稿紙に書き直したもの]

四月十日

十一日

十一時半、十二時半……四時半——明るい!

薄くではあるけれども、随分よく寝た。何となくざわ〜と落着かないので、「寝てやれ」と思って寝たのだが、^{〔国〕}甲府津までの間は、まるでねられなかった。

豊橋で顔を洗って、食堂車に行こうとすると、

「土方君!」。後から声がする。しまった!

通称、清ちゃんが、厚い眼鏡を光らせる。これは苦手だ。だが、最早決して逃れることは出来ない。食堂もつきあふ。話相手にもなる。京都で下車して、見物の御供をさせる約束もする。随分困りもする。(何故なら、自分は、今度の旅は金がきち〜なので、昨夜からお茶一杯飲まないで居るのである)。そのうちに、美濃の平原は曠々と開けて、菜種の黄は、眼望数里を明々と光らせる。桜は少し遅いようだが、松のはえた小高い山に差しかかると、松の根元には、つつじが藤紫に咲き、彦根の城が白く遠く過ぎる頃から、静かな曇日の琵琶湖が眺を十に二十に展開させる。山々は円くなって来る。平安の都は、近づいて来る。併し、十時二十分、汽車が京都につくと同時に、自分は清ちゃんの捕虜になって居るのをつく〜と辛く思ふ。

先づ、嵐山へ出かける。絵巻のような景色が、まぶしい程静かに開ける。流れはゆるく、赤松の山の中に薄紅い桜が浮き、楓の若葉は互え渡って居る。

「来てよかったな」と思ふ。清ちゃんに感謝する。但し、此の美しい景色の中に、清ちゃんの至極真面目で唱ふ out of tune のエレジイを聞いた時には、ひやっとしないでは居られない。

✓嵐山 こむそうも居て 花見かな ^{〔欄外に記す〕} [虚無僧]

^{〔欄外に記す〕}
[嵐山神社にて]

✓見たるかな 花と花縫ふ人の群

✓花見ると 花見る人の花々に わが酔ひにけり 酔ひにけりかも

✓花を見て 京の舞妓の絵姿も 買ふ気になりぬ……罪とは云はじな

渡月橋を渡って、其処此処の茶店には、花よりも美しい女ごの姿と、春の水より優しく響く優しい声と、優しい京言葉がある。その中に、幾人ものこむそうは、深網傘の下

から、りょうへと尺八を奏で出で、綺麗に着飾った小娘をつれた「流し」は、そここの仮筵に招かれて、あはれに唱ひ、可憐に舞ひ出る。京の花見は、優しく昔を偲〔中世カ〕ばせる。

電車を返して四条に出る。四条の橋を渡って、洗斗町〔先〕を通ってみる。幅狭い〔狭〕通りの両側は、ぎっしり昔じみた格子造りの小さい家が並び、「何の家」とか、又芸妓らしい名がづらっと出て居る。花崗岩で舗きつめた道は、綺麗に掃き清められて、水などうってある。加茂の河原は毛氈の如な青草が萌え出で、女子など出て遊んで居る処もある。

〔欄外に記す〕
[兩岸は、葉桜と柳の若芽が目覚める如く、藍色の浅い水に映る。]

三条の橋を渡って、智恩院の中から円山公園に出る。こども美しいが、何分にも勞れた。人出は、智恩院に詣る人と共に、大変なものである。電車の中などで、鼻のつんとした口の可愛い、幾分おでこの類型的日本美人を見る。又公家、武人或は平の某など云ひ度いような少年にも逢ふ。源氏物語の挿画にでもありさうな鼻の線の柔らかい、下ぶくれの少女も見かけた。

四時十分の汽車で奈良に来る。沿線には、茶畑がまだ萌えないで、濃くくすんでは居るけれども、何処も此処も柵を結って、こもかけの用意がすっかり出来て居る。玉水から先きは、急に土の色が真白になって、青い青い麦などの畑の間を白い道がうねへと続き、佐保川は美しい河原を見せて、綺麗な水を静かにやる。五時半、奈良につくと、勞れた体を車に乗せて、大文字屋に来る。夕方の奈良の風は柔らかかった。

あを
✓藍きあをき賀茂の流れに若柳 さやに映せり 葉桜もあり

溝川に菜種の黄はまだら
黒塀にもたれて
口あいて
汽車に手をふる
春の名古屋の
朝の町っ子

[×を附す]

十二日

午前中博物館を見、公園の中を歩いて来る。
朝早く、墨の如な雲が流れて、夕立のような雨が来ては過ぎたが、そのうちに風が烈しく、

青空には輝くような白雲が飛ぶ。ひどく寒い。午後三時、連中がやって来る。

十三日

東大寺から始める。東大寺には全く見るものがない。次に三月堂。本尊及び後方の塑造の吉祥天に、殊に後者に頭を下げる。

博物館。昨日もゆっくり見て置いたので、一人落着いて見る事が出来る。併し何分にもひどく寒く、顫えるようにして早く出て来る。

春日神社で神楽を見、若草山に上る。若草山には、美裙連が奇声をあげて戯れ、山下の茶屋には三弦の響、猥らな笑声がひびく。手向山八幡に詣り退散。東大寺鐘楼では、茶目連が鐘をつきならし、念仏堂の格子障子の破目から片目で本尊様を拝めば、これは又優しい顔で睜みかへされる。春日神社では、柚木燈籠をよいものに思ふ。四月堂でも障子からのぞいたけれど、本尊、弘仁時代の千手観音も他の少しばかりの諸仏も、暗くてよくは見えない。

十四日

風はまだ寒いけれども、天気はだんへによくなる。昨夜の酔ひが、まだはっきりしないので、途中ラムネを煽って、先づ塔頭に行く。ここの石刻は可成り興味深い。次に、新薬師寺に行く。本尊も写真で見て、まるで馬鹿にして居たけれども、斜に見た姿などは、なかなか立派なものである。其他では、脇士の十一面観音(左)と千仏の側の薬師達とは、それへに美しさと面白味とをもつ。十輪院では、本尊はまるで駄目だが、本尊をのぞいた他の浮彫は、なかなかいい。魚養の塚は珍しいものである。福智院の本尊も同寺の塵に似ず、捨てがたいものであり、極楽院に行つては、更に驚く。禅堂は壁など壊れ置ち、たまへ私立女学校の教室にあてられ、本堂は又特別保護建造物とも思へないほどに荒れはてて居る。本尊は前の福智院のものと同じく、ありふれたものではあるけれども、決して劣つたものではなく、聖徳大師^{〔太子〕}十六歳の御像も面白い。と云ふより、よく出来て居る。

次は、興福寺。東金堂に、僅かに見るものもあるが、金堂北圓堂、南圓堂には、更に見るものがない。

新薬師寺に行く。道は土堀などが荒れはてて、過ぎゆくものの哀愁を感じさせる。新薬師寺にある光薬師の傍にある、聖徳太子二歳の像は一寸面白い。最後に、戒壇院の四天王には感心して帰る。

十五日

天気益々好し。崩れかかりの転害門を見て、昨日の極楽院の廃頽を思ひ、郊外に出ては、春の大和平野をかぎりなく美しく思ふ。朗かな春日を浴びて、畑中の白い道を歩みなが

ら、つくへ奈良の古を懐かしく思ふ。遠い丘には、桃の花の薄紅きを眺め、近き道の辺に菜の花の黄を縫うて、興福院の前を通り、不退寺に行く。不退寺には、別段見るべきものもないけれども、華車な多宝塔を池をへだて、見ると、ここには武ぼった鎌倉時の優しい他の半面が見えて、哀愁的な親しみを覚える。

それから、大和平野の奥深く、平城宮大極殿跡の土壇に憩ふて、ほのかに千年前の榮華を夢み、海龍王寺に行くと、ここは門から第二の門の間、赤らかな土塀にかこまれて、静かな過去を物語る。けれども西金堂の荒廃は見るもあはれに、講堂の中には、文殊様が只一つ淋しげに（死に残されたように）まつられて居る。海龍王寺を出て法華寺に行くと、これはまた国分尼寺の総本寺だけあって、境内も綺麗に掃き清められ、堂宇も秀頼の再興にかかって、美しく飾られて居る。

清楚ではあるけれども、尼寺に应はしく優しい本堂の中には、かの有名な十一面観音が、堂々たる厨子の中に安置され、前には^{〔皇后〕}后皇陛下から下された立派な燈籠に、うっすらと御燈火がゆらいで居る。ここでは、有名な御守犬を一つ買って、西大寺に向ふ。西大寺で食事をすませ、さて本堂に行くと、ここは又暗い。香でいぶし尽された堂に、やたらに国宝の舍利塔^{〔塔カ〕}があり、古画があり、あらゆる仏像がそこここにある。参詣人やら見物人やらあとも切らないが、あまりに寺臭くていやな気がする。お茶ものまず、四王堂だけを一寸入って見る。愛染堂にも入らず、喜光寺に向ふと、この荒廃は又ひどい。瓦は落ち崩れ、太いオダルキ？は折れて、見るかげもない。全体としては、あまりに建築的な技巧の興味にひかれた為にか、恐らくは、作者のねらひ処とはひどくかけはなれた、グロテスクな感じを持つ、而も、或ひは其の為にか、又すてがたい一種の気分をたたへて居る。本尊をのぞくと、これは大きな木彫の阿弥陀三尊で、すすけて堂に应はしい。併し何とはなく同情をひくような処をもって居る。垂仁天皇の偉大なる山稜に詣って、もはやつかれきって唐招提寺に行く。そこで、大ふく五つに元気をつけて金堂に入ると、労れも忘れるほど美しい、天井の高い、気持のいい堂内には、驚くべき古諸仏がある。併し、これについては又後に書くとして、講堂に入っては、本尊をそっちのけにして、白鳳時のひどく破損しては居るけれども、此の上もなく美しい諸遺物にすいついてしまふ。多宝如来の上半身、首なしの如来形立像、菩薩頭、仏頭は、中でもたまらないほどにすばらしいものである。殊に、菩薩頭の如きは、^{〔垂延〕}唾延千丈に働する。此の寺の金堂、講堂と云ひ、鼓楼と云ひ、松多い境内と云ひ、最も厳肅なる悦びを覚えしめる。

次に、薬師寺。此の寺も又、限りなく美しいものである。東塔と金堂の薬師三尊仏には頭を下げる。けれど、前の招提寺の講堂の遺物の如に興味深いものではないけども。

講堂の薬師三尊は、前者を見た目には、あはれにも頼りないものである。可成に期待して居た東院堂の聖観音は、案外大きな気分をもたず、かたい感じがする。この十一面観音は美しいものだが、あまりに悪い意味での弘仁臭味があるのですかない。併し、ひどく労れては居たが、最後の二寺ですっかりいい気持になって、電車で宿へかへる。

らへと歩いて、三条の橋を渡る頃、再び雨は篠ついて降るので、軒下で雨の小止みになるのをまって、寺町の緑屋旅館に宿る。

今日は、朗らかな春の日を一ぱいにあびて、海龍王寺、法華寺を詣ねようと、桃の花霞む畑道を行った時と全く趣を違ひへて、これはまた柔らかな春雨にけむる茶畑の間を歩いて、しみへこと雨の眺めを、宇治川の流れを親しいものに思ふ。

二十日

京都の博物館には、奈良を見てきた目には、更に見るものがない。只、支那龍門又印度等から来たものに、小さいものではあるけれども、面白いものが沢山ある。も一つ、丁度浮世絵の特別陳列があったので、ここには珍しい、興味深いものが沢山あった。殊に、北斎の沢山の驚くべきものがある。

三条から電車で大津に行き、三井寺の高い石段を昇ると、美しい水郷の春景が開ける。けれど、寺には、何の見るものもないので逃げ出して、電車で錦¹⁷⁸⁾の江波の親戚の処へ遊びに行く。

ここで琵琶湖に釣糸を垂れて、ボテ二三尾を得たばかり。柔らかな春の日を浴びて、水に映る比良山を窓べに見て、ビールと鳥鍋の御馳走に、生き返ったような心で、夜、石山寺に行き、三日月楼に宿る。夜の石山寺は早く家々の戸を締め、真暗な寂しいものだった。

二十一日

又々、小さな雨が降って居る。寂しい町ではあるけれども、瀬田川の流れは静かに、兩岸の若やかな緑を浮べて琵琶湖に注ぎ、遠い山々を霞めて美しい。湿った白い道を石山駅まで歩いて、汽車で山科へ行く。醍醐寺ですっかり気持を悪くして法界寺に行くと、ここは小じんまりとした、優しい心地よいお寺である。お香の香が高くゆって、旅を忘れて落ち着くことが出来る。御香の香をいいものに思ったのは、ここと奈良の十輪院だった。桃山まで電車に乗り、両御陵を参拝して京都に帰ると、宿が変わって居る。今度は、三条大橋の布袋屋と云ふのに宿る。濡れ靴で三四里も田舎道を歩いてすっかり労れた上に、まだ雨が降ったり止んだりして居るので、町にも出ない。京都に来ては、もう何も見るものもないので、漸く郷心がついて、東京に帰り度くてたまらない。

二十二日

大徳寺をざっと見て、仁和寺に行く。ここでもでんがく以上にたいしたものもなく、妙心寺に行く。ここの茶室は、繊細な極こったものであるが、本寺には見るものなく、最後に〔大秦〕秦太の広隆寺に行くと、ここには奈良の諸仏を思はせるような美しい不空鞞索観音がある。八臂のうち、下に垂れた二臂は、殊にたまらなくいい感じがする。尚霊宝殿

には沢山の古いものがあるが、奈良のよいものに比べては、これとは思ふものもない。如意輪観音の木彫と大日如来の小さい方と、吉祥天の一つとをよいものに思ふ。

夜は、都踊を見に行く。歌舞伎芝居よりも、更にみやびやかな悠長な都踊を、あくまでも京都らしい気持で見度い為に、財布の底をはたく思ひで一等席に行く。豪華な大玄関から入って、紅毛氈をふんで広い茶室に入ると、黒塗の机が何列かに並んで、同じ黒塗の畳を上にはった、十字の足のついた牀机が並んで居る。自分もその一つに腰を下して待つうちに、八人の美しく着飾った十三四程の小妓が、一人一人の前に御茶菓子を運んで、恭しく礼して入る。七分通りくばれた頃、正面の床の側の茶席に、つぶし嶋田の芸妓が黒のすそ模様で現れ、釜の湯をくんで、礼式よろしく濃茶を立てはじめる。

丁度、お茶菓子が運び終はる頃、茶がたつと、側に侍って居た小妓が、それを第一番の客にすすめる。すると、あとは又八人の小妓が^屏風裏から、同じ黒地に白い団子を焼き出した、粋な茶器に濃茶を一人一人にすすめる。そこで、茶のまはったものからどん／＼飲み終へて、菓子を都踊の皿ごと紙につゝんで袂に入れて、控室に行く。ここでしばらく待って、愈々演技場に入るのである。ここまでのいい気持でやって来ると、今度は急に騒々しくなると、二等の客がなだれをうって入って来る。而して、阿鼻叫喚のうちに席を奪ひ合ふ有様が暫らくの間、今までの気持を根本からひっくりかへしてしまふ。併しこれとても、後から考へるならば、「名物都踊」を見る為に、如何に善男善女が礼を省みず、振を乱して我を先づる有様が、恐らくは都踊の名と共に遠い昔から伝はったものとして、あながち今の世が、都踊を汚したもので無いものようにも思はれる。何故なら、あの絢爛な演技場の中で聞いた叫喚は、丸の内ビルディングの中の雑踏とは自ら異ったものであるから、踊はさして意味のあるものでもなく、舞台と同じくひたすら美しく、はなやかなものである。殊に、八つ鹿踊は上品な可憐なものである。併し何と云っても、一番心にくひ入るものは、洗練された三絃と歌と鼓、太鼓と鐘である。

二十三日

京都御所と仙洞御所の庭を見て、今出川出町から高野川の川端を上って、修学院に行く。門を入れて白砂のつまさき上りの坂道をうねり／＼、大根と菜種の花、そら豆の花の間をぬって昇ると、裏手は嵐山の景にも似て、優しい丸い山にあか松が生ひ並び、其間に処々楓の緑があっさりと浮ぶように光って居る。

中の茶屋が一番完備したもので、なか／＼^複複雑な味をもって居る。上の茶屋は、茶屋自身よりも寧ろ眺めの美しさによって、ここに一席の茶筵をのべ度いような気がする。

再び高野川の川端を歩いて帰る。高野川の川原は、美しい青草がもえて、川で洗った純白な布が、春の淡雪のように、処々その緑をのぞかせて、河原一面にさらされて居る。

自分は、友と二人で歩いて居た。友は何かの話しから、京都に来て全く京都に来て居る気がしないと云った。

そこで自分は説明する。「君は京都にはじめて来たからだ」。全く自分等の知る京都は、何々物語の中の「京都」である。如何に京都であっても、決して時代を超越したものではない。町なる京都に活動写真小屋が立ち、せるろいどの人形が現はれることは至極当然なことである。併し尚、京都の京都なることは、町一通を歩けばそこにはっきりと感得せられるのである。はじめて来たものが、京都らしい気持になれないのは、京都なる概念が全然間違っているからである。自分は、京都に既に三度か或は四度も来て居る。それ故、京都に来て京都らしさを思ふ程感ずることが出来る。それは、東都の山の手に住む自分等が、下町の雑踏の中にも、僅かに残る古い町家の趣味伝統の裏に、立派に錦絵の情緒を築き上げることが出来るのと一般である。尚云ふならば、現下の京都を更に深く知るものにして、更に深く「京都」を握りしめることが出来るのである¹⁷⁹⁾。

夕食後、歩いて岡崎の公会堂にホルマンを聞きに行く。この公会堂は純日本式の建物で、二条の離宮の昔を思はせるような折上げの合天井には、金の金具が光り、縹緗彩色が施され、壁は豪華なくどい程な切地で張られて居る。二階の新しい白木の勾欄は、斗型の上の肘木に支へられ、正面のステイヂは真中に四角く出張って、上にステイヂと同じ形の屋根が出張って、紅茶のどんすの幕が垂れて居る。十七世紀のシャンデリエを思はせるような枝形の電燈が五つ下って、室内の濃艶な色と金の金具に照り返し、眩い程に明るくともって居る。

どんすの幕が静かに上ると、バックは真黒な一枚の幕だけで、明るい緑の切でキョート フィルハーモニック ソサエティーと横文字で書かれて居る。併し、ピアノの側に同じ緑でスタインエーの広告が見出された時には、イヤな気持がした。

やがて、ホルマンの真白な長髪が黒いバックに浮んだ時は、それでもたまらなく嬉しかった。そして、ヘンデルのソナタが響く。グラヴ、アレグロ、サラバンド、アレグロとあざやかに奏されると、二週間のせわしない旅の心も全く忘れる。

ビノグラドフのピアノも嬉しく聞いた。丁度此の旅に出る一月程前に、ブルメスターを聞いた時、バルダスの同じものを聞いたが（あの時のバルダスは、音楽学校あたりでも大変な評判だったにもかかわらず）、自分の日記を見ても、バルダスの名も書いてない程に無感銘だった。そして、今ビノグラドフのひいたショパンのベルスースからバルダスのそれを思ひ出さうとしても、全く無意義な程である。マルシュ・ミリタリエは、しゃれ過ぎる程にしゃれてひかれた。そのいやみを自覚しながらも、やっぱり気持ちよく聞いて居た。

休憩の後に、^(弾)コルニドライが引かれる。曲をよく知って居る上に、今迄に沢山の人の同じものを聞いて居たので、今日の中ではやはり一番面白く聞いた。アンコールとして、殆どすべてピティカートでばかり進行する誰れかのセレナードが奏かれる。ポッケリニのロンド、ポッパーのアレキン。而して、ホルマン自身のル・ルーエがひかれる。ル・ルーエは明るい、若やかな専心な悦びに充ちたものだった。最後に、再びアンコールと

して、ル・サインがひかれた。ホルマンが、技巧其物のような難曲をさけて、ひたすら静かな情調に富んだものを選んでくれたことも嬉しいことだった。而して、ホルマン自身も恐らくは詩人なのであらう。

二十四日

七条大宮から田舎道を一里も歩いて、桂離宮に行く。御車寄から入って古書院に入ると、古書院の全体が中二階になって居て、実にこったものである。月見台と伝えられて居る竹張の露台が、得意の庭池の前につき出して居る。庭はあらゆる石と水とをつかひ尽したもので、実にその中を歩けば歩くだけ、複雑〔複〕な感じをもって居る。此処の茶室が、一見極めて渋いものではあるけれども、釘かくし一つにも、引手の一つ一つにも、思ふ様の意企が現はれて居るのから見れば、如何に贅沢に成り上りものの豊太公が、其の成金的欲求〔分カ〕に甘へて出来たものかが別る。

飛び石の外は、地も見えぬ程に一寸程にも杉苔が盛り上って居るのなども、道がに大事にされた庭である。丁度自分達が離宮に居た時、独逸大使の案内でブルメスターが両手に杖をつきながら拝観〔奥〕に来て居た。そこからすき腹をかかへて、白埃を浴びて田舎道を、場末の町を、芥の様な嗅ひの中を二条へと歩く。

町に入った処で、かぶりつくように中食をすませて、二条の離宮を見る。次に西本願寺。西本願寺は、今は絶体〔対〕に拝観を宥さず、一萬円も寄附したものが、やうやく廊下伝ひに各室を見ることが出来る位との事だったが、丁度美校出の笹川氏が、本願寺の建築の方に関係して居られた為に、特別の便宜を与へられて、白書院から千畳敷の対面所、玄関、浪の間から、飛雲閣の三層までも見尽すことが出来た。

〔欄外に記す〕
[裏手を通りぬけると、ここは世捨人の集ひとも見えず、役所か或は大会社のように、堆い帖簿の中に人々は埋れながら働いて居る。慎しい三宝の奴は早く此の寺から逃げ、開祖親鸞も地下に、否浄土に目をむいて居るだらう。]

二十五日

又々雨の中を、三条蹴上げから金地院に行く。雨に濡れた入母屋風の柿茸の屋根の傾斜が、しっとりと落ち着いた気持を持って居る。方丈の中を一廻りして、南禅寺の三門だけを見る。重層内には、一面にしつこい極彩色が施され、まづい、併し面白い十六羅漢が置かれて居る。高台寺にゆくと、ここは又金閣寺あたりと同じ様に名所気分たっぷり、書くほどのこともない。雨も降るので、清水は境内をぐるぐる廻って、三十三間堂に行く。ここから電車で七条大宮まで行き、此の旅の最後を飾る為に東寺に行く。

〔欄外に記す〕
[十六羅漢の顔と全体のコンポジションに就て]

南大門を入れて真直ぐに金堂、講堂、食堂と、同じような朱塗の建物が重なって居る。建物としても、又、安置された諸像も、講堂が一番である。

講堂の後面に、何か焼物らしい螺髪（らふ）の三仏座像がある。エキゾチックな、支那にも少ない様な顔、諧謔的ではあるけれども、親しみ深い顔、朝鮮あたりのものではあるまいかと思はれる。坊さんに聞いて見ると、
「あゝ、あれですか。あれは何でもないのです。」ときり出して、「あれは、印度あたりにあったものを取って来たものようですが、やはり金で出来てゐるようです。はじめは前に安置してありましたが、あんなものを正面に置いておくのも変ですし、仕方がありませんからあすこに置きましたが、何にもいはれも何もあるものではありません。」。寺では、こんなに厄介扱ひされて居り、又ここにはこんなにも心を引かれて居るものがあるのに、何故に此の仏像はこんな不遇の地にいつまでか置かれなければならないのか。こんな所に人しれず置かず、せめては博物館にでも出陳して、心ある人々の供養を受けさせるがいい。愈々旅行も終へて、夜九時五十二分の汽車で東京に向ふ。

二十六日

浜松あたりに来た頃から、漸く空が白んでくる。昨夜は隣りに乗り合はせた小娘が、寝られないと云って、一夜まんじりともさせてくれなかった。

静岡辺に来た頃から雨も上って、雲の多い空に、やがて純白の富士の高根が、朝日を受けて寝足らはない目に眩く光った。九時四十五分、東京駅着。長旅の労れが一時に出て、快い朝風に吹かれながら、車の上にまどろみまどろみ家に帰ると、妹の子、小さな小さな赤んぼが生れて居た。忠久¹⁸⁰と云ふ。昼食後、直ぐに寝てしまふ。

二十七日

今年は旅に出て居たので（毎年十七日には、青木の家（あおきのいへ）に椿の花をもって行くのに）、せめて同じ日附で手紙だけでも出して置かうと思って書きかけたけれども、何うしても落着くことが出来ないで、書きかけては止めた。何だか心にかかるので、午後、もう椿も殆ど終りではあるけれども、少しばかり折って、青木のうちに行つて来た。小母さんは留守だったので、椿だけ置いて、帰りに田辺サンに行く。

二十八日

雨降ったり止んだり。午後、〔小城〕文ちゃんが遊びに来て宿る。

二十九日 sunday

午後、仏国美術展を見に行く。ローランサンの二枚、カリエールの三枚、バルテレイの三枚が一番好きだった。

三十日

あんなにも待ちあぐんでゐた
あんなにもこがれきってゐた
だが、今では
私には要もない春

やっとのことで春になって見れば
樹々は若やかな緑に埋れても
つつじは紫に白に又赤く燃えても
どうだんが白い小壺のような花を垂れても
庭土は黒々と水ぐみ
青苔の又名も知らない小草のもとに
蟲等が小さな翅をふるはせても
私の心の庭はいつものように
過ぎ去り過ぎ去った幾春のように
充たされたことがないどころか
春は裏切り裏切りながら
ほんの^{〔偶〕}遇然を信じて待つものの心に
尚も幻の甘い香りを送るばかりではないか

私はもう恨みもしない
私はもう嘆きもしまい
ただ、今では
私には要もない春¹⁸¹⁾

[×を附す]

五月

三日
上野の山は
みどりに緑に
何処を歩いても
只みどりです

毎日毎日

春雨とも云へないような
蔭気な氷雨が、その緑葉を
只濡らします

蔭も緑なら
したたる雫も緑なら
行き合ふ顔も、顔も
只悲しげです

鳥も黙って濡れるなら
けふ日もこれで暮れるなら
あしたも雨、あめ
あさってまでも雨でせう

〔×を附す〕

四日

陰気な雨は、昨夜の風にはらはれて、深い青空には真白な雲が飛び、久々に爽やかな気がめぐる。夜はクライスラーを聞きに行く。ブラームスのソナタ G メイジャー op. 78 はすばらしいものだった。最後のボヘミアン・ファンタジーとアンコールのユモレスクも、非常によかった。

聴衆は熱狂して居た。ポリシネルのセレナードなどは、三度も続けて奏かれた。アンコールばかりでも、六曲も奏かれたのである。

五日

五時、小石川に行く。皆留守である。三十分余たって、^{〔土方梅子〕}梅さんが、敬太をつれて帰って来る。けれど、又直ぐに出かけると云ふので、神保町まで一緒に自動車に来て、別れて帰る。

六日 Sunday

朝、^{〔知彰〕}江波の処へ行く。十一時、一緒に木山を誘って宮崎¹⁸²⁾に行く。木山の処で、倉沢¹⁸³⁾と杉浦¹⁸³⁾にも合ふ。^{〔逢〕}明日からのモデルを定めて、木山の家^{〔豊四郎〕}に引返へすと、昼には、朝から雲もない晴天だったのに、見る／＼曇って来て、雨が降り出す。其上、又久々で花を引かせられる。何故こんなに不快な時に運悪くも勝つのか。

自分は、東京に帰って以来の自分の日記を読み直さなくとも、其間どんなにくだらない日を送ったかをよく知って居る。而して、家に帰ると、お慶ちゃん¹⁸⁴⁾が来て居る。そ

して、中井さんが来て、十時半過ぎに帰って行く。お慶ちゃんは、宿る。そして、自分は「今日は」と思ふ心、「今日は」と思ふ心に裏切られる。そして、自分は、何物とも解らないものに、此の春にか、雨にか、又或は殆ど残酷と思はれる偶然にか、むら〜と反抗する心で一杯になる。何故自分が一歩足を門外に踏み出すにも用心するような時に、偶然は斯くも自分を引き縛るのか。その意味は、かうである。自分が身を埒内に縛ることは、心の自由を願ふことに外ならないのである。

七日

馬鹿馬鹿しい日が続くことよ！

八日

雨が降って雨が降って
日が過ぎ二日がゆくうちに
黒い庭土は苔ばんで
真青になってしまった
草々も伸びるがまゝに伸びて
濡雀はそのなかに
埋もれるようになった
柿の芽は太り
楓の黄緑は漸く濃くなってゆく
古い榎も枝先をかくし
橡の広葉は暗い蔭を作った
頑な榎の木も古葉を落して
うひ〜しく、けれど悲しく生れかほる
それもいい
だが自分の顔
自分の顔は日に次ぐ怒りと苛立たしさに
蒼くなって顫へてゐる
それもまだいい
野良犬が泥にまみれて
力なく首をうなだれ
棒のような尻尾を垂れた姿を見ては
自分の姿を鏡の中に見る思ひで
蹴飛ばしても足りない気がする
自分は唾して

目をつぶって
[駆] 馳け出すようにして逃げ去る
其の上家では無心の赤子が
醒めて居る間泣きつゞけ、^[叫] おらび立てる
それもまだいい
だが蔭気なしつこい
憎ましい、きたならしい雨 々 々 々 !

〔×を附す〕

悩ましい春の永日を
週日降り込めた雨は
皆人を馬鹿にってしまった
道はぬかるんでぬかるんで
往く人々は無気味に
目を据え或はとりとめもなく
そこからここへ心なく見やりながら
放心者のように
口をあんぐりあいて
走りまはる車や、深い水たまりを
よけようとせせず
どぶどろの中に重い足を引摺る
ここにまた電車の中の人々は
やりどころのない
感情の鬱積に労れた頭を
まぎらはしい
ほんの十分に足りないまどろみに忘れ
或は亘えきった心にとりついて
決してはなれないものうさを
一思ひにかみしめようと
歪んだ唇を引きしめ
何物も映らうとはしない瞳を
虚しく見開いて居る
斯くても蔭気な、しつこい
憎ましいきたならしい雨 々 々 々 !

[×を附す]

蒸し暑き
春の宵なら
蒸し暑き
春の雨なり
風も交へり

はかなかる
思ひのみ
むねに燃ゆれど——
この思ひ
天には届かず

いかなれば
わが思ひ
天には届かざる
否、否
恋は恋
思ひは思ひ

東台彫刻会を見る。^[照]安藤氏の作に頭を下げる。陽成二氏、萩島安二氏の諸作は興味あるものである。其他、吉田三郎氏の確りしたものに感心はするが、御大連、^[文夫]朝倉氏、^[右一郎]小倉氏、^[伸]内藤氏等の、さてもさてもまづいこと、いや、安っぽいこと。

九日

降りぬいた雨もやっとかれて、午後から重い雲が散り、蒼い空には白い雲が飛び、暖かい日が輝くと、上野の山は急に広くなったように思はれる。午に雪舟の遺墨展覧会を見る。道にと思はれる。番外に出て居た応挙の御物も、立派なものだった。愈々午後から小さい全身にとりかかる。

十日

ひとりで

物を考へて居ると
雀の聲がチと聞えて
そして今度はチチと聞えて
それぎり
青葉もゆるがなかった

やがて
生松葉がくすぶるように
赤ン坊がぶすぶす泣きかけて
またそのまゝ寝てしまった

それから
なぜとなく目を仰ぐと
いつか空はうっすらと蒼ぐみ
柿の芽は明るく透いて居る

ところで
よくも降ったものだが
あしたこそ天気なら——
いや、有がたいことだ

あしたこそ——
この位の願は許されてもいい
いや、許されるさと甘へてみると

「どうともお前さんの勝手だがな
お前さんもなかなかお人がいい
だがまあ落着いて
考へごとでも続けたがよからうよ」

そんなものかな
では、ひとりで考へるとしようか
——空はうっすらと蒼いし
——柿の芽は明るく透いて居るし……

〔×を附す〕

十一日

見ろ、又朝から糠のような雨は、黙ってじめ〜と降り、屋根を伝ひ、青葉にとまり、
雫となって地に吸ひ込まれてゆく
儂い夢でもあることか
頼りない願でもあることか
待っても待っても、ただ、音もなく
なまなましい悲怨が
無気味な呪詛のように
弱々しい執拗を以て降りつゞける
一日、次ぐ一日の永く遅いことよ
今はとりとめもない空想でも
御座なりの道化笑でも
どうで消えゆく紫の烟でもいい
軽い心からの明るい思ひよ……
さなくば空虚な涙をも喜ぶような
くだらない過去の青春の感傷よ――

[×を附す]

十二日

晴れ。午後、母と音楽学校に、山田流の琴の演奏会に行く。能野と寿競とをいいものに思ふ。それから今井氏の松竹梅を面白く思ふ。夕方から三光幼稚園に竹友藻風氏の講演を聞きに行く。「ダンテの青年時代」と云ふ題にひかされて行ったのであるけれども、自分の知って居るダンテ以上に何の得るところもなかった。

十三日 sunday

早昼で弟と角力を見に行く。

十四日

春陽会¹⁸⁵⁾を見る。急に蒸々と暑くなる。佑さんが突然出てくる。

十五日

雲は重い。学校のかへり、三越の独逸表現派展覧会を見る。くだらないものが多いけれど、ベヒシュタイン其他、四、五いいものもある。ウィルドと云ふ人の木彫も面白かったし、カンディンスキーの即興的のものでなく、思ひきって理智のかった美しいコンポジションの版画もあった。ココシユカはまるで好かない。

十六日

曇雨。夕食後、江波の処へ行く。溝口も来て居て、十時半頃まで話して居た。

十七日

曇雨。佑さんは、晩に帰っていった。

十八日

晴。^[与作カ]竹田氏を誘って、角力を見にゆく。

十九日

午後、倉沢が来る。

二十日 Sunday

いつの間に咲いて、いつの間に散ったのか、今日久々で閑やかな日影を透かせて、小窓近くさしかけた柿の葉裏には、青い小さい蕾がみっしりとついて、霞んだ空から吹きおろす生温い風に、ゆられゆられする。

竹藪のひまへに、崖下の西洋館の赤屋根がうつり、朝から赤んぼは、静かにして居る。

水蒸気の多い晴れやかな初夏の日が、午には嵐のようなから風となり、乾いた土からは黄塵が巻き上り、机の上も本も室の隅々まで、又汗ばんだ顔や手も、ざらへと埃じみ、午後三時には、怪しげな雲が空を被うてしまふ。

朝から晩まで、終日室に閉じこもって、さて、何をすともなく、それでも飽かず机に向って居るうちには、数々の詩集や評論や近代文学など読んだ。日本詩人——先達、神田の夜店で二十五銭で五冊買って来た古い日本詩人の中の評論、殊に詩人等がお互に浅ましい罵詈を投げ合ひ、自惚れたり、嘲笑ったりして居る様は、自分を最も不快にする。

晩には、一寸外を歩いてくる。十時過ぎに中井氏が来て宿る。其頃から雨になる。

二十一日

終日雨は止まないけれども、朝からだんへに風は落ちて、夕方には静かな庭に、霞のような煙のような雨が、うすものを張ったように、音なく降ってゐる。

学校のかへり、江波と曠原社の記念展覧会¹⁸⁶⁾を見てくる。

二十二日

さんらんと輝く光を夢みるばかり
けれど、明ける日も明ける朝も
黙ってうなだれて、じめへしてゐる

五月！ 初夏！

大空は只一重、灰色の壁
あたりを被ふ濃い緑も
只一つ、墓場の妖霊

五月！ 初夏！

そんな心も已に已に
遠い過去の感傷の紙屑か
正直な赤児は朝から泣き続ける

五月！ 初夏！

それも只、裏切られ叛かれながら
尚も儚なく、次ぐ一日、次ぐ一日に
さんらんと輝く心を待ちわびるばかり

[×を附す]

二十三日

雨雨雨々々、寒い！

二十四日

曇。学校のかへり、目白の中嶋の処を、江波と訪ねる。夕食前、皆で文化村¹⁸⁷⁾の方を一廻して夕食を済ませると、暫らくして、皆で二瓶^[等親]の処に行く。星氏も来て居て、十一時近くまで遊んで、遅く家へかへると、野間^[政治]が二十二日に死去した通知が来て居る。これで四人目だ。自分の親しくして居る友は、みんな死んで了ふ！自分などには思ひもよらない大金を投じて買った、ロダンのシャヴァンヌ銅像。それ只一つ枕元に置いて、喜びと恨めしさを一緒に、朝夕眺めながら死んだ野間が、幸とも不幸とも、今自分には云ひきれないが、自分が生きて居て、くだらない彫刻をして居ることか。或は、くだ

らないなりに、彫刻を[・]続[・]け[・]て[・]居[・]る[・]こ[・]と[・]が、二つのうちどちらの一つかが厳肅な必然に結ばれて居るやうな気がしてならない。

二十五日

江波兄弟、中嶋、三沢と高嶋屋へ、松方氏が外国から買ひ戻して来た錦絵の展覧会を見に行く。処が大変な人で、まるで見る事が出来ないの、「明日朝、見に来る」と思って、帰って来てしまふ。それでも、一通り見ただけではあるけれども、春信の「おせんの茶屋」だの、写楽の驚ろくべき諸作、「松元米三郎の娘姿」「大谷徳次(奴袖蔵)」「市川高麗蔵と中山富三郎」(野口氏の本に出て居る「瀬川菊之丞と中村宗十郎」と同じもの?)、春潮のブラック・エンド・ホワイトの二枚など、忘れられないものがある。京都の博物館で今度見て来た浮世絵は、皆肉筆のものであったし、自分は錦絵のよいものは今度が始めてだったので、種々まづい想像などして居たが、版の美しさは、実に遙かに予期以上のものだった。

〔欄外に記す〕
[松方氏買イモドシノ錦絵展]

二十六日

昨日午後からやっと霽れ上った空が、夕方には又々怪うげに見えたが、今日はまた一日晴々として、如何にも初夏と云ったような気がする。朝八時半には、高島屋の三階に已に行つて居た。道にまだこの朝っぱらから呉服屋に、特に絵を見に来て居る人は数へる程しかなかった。いきなり奥の間の写楽の前に立って、吸ひつけられるように一枚一枚に見入つて居た。自分はどの位写楽の前に立ち続けたらう。而して、考へた。こんな見方をして居たら、一日かかつたって見尽すことは出来ない。自分は、もっとよく見度〔狭〕い気持と全部見度い気持の間に板狭みになつてしまった。併し、結局全部見ようと決めた。何故なら、自分は兎も角、今迄によい錦絵をほんの少ししか見ては居ないし、此処に集められたものは、兎も角一粒えりのものばかりだから。其上、どんなによく見た処で、此の百枚にもあまるものを頭に刻むことは到底出来ないし、第一頭がまゐつてしまふ。で、兎も角全部見た。

豊国あたりの達者なことは、実に驚くべきものではある。只、うらむらくは、悪達者とさへ云へるような、如何にも達者なばかりのものだった。

春信は、身自ら大和絵師と任じただけに、如何にも品のあるものばかりである。其上、春信の人物程画面に浸りきつたものはない。歌麿などのものになると、時々自分の美しさを自覚して居て、われわれの方をちらっとぬすみ見したりする。けれども春信のものになると、決してそんなことがない。彼女等は、われわれが居ても居なくても、まるでかまはない。否、われわれが居ることに全く気がつかないらしい。

写楽の人物は、只一人居ても、或は二人居ても、常に画面の外に、何か「写楽のゴースト」

のようなものを無気味に見出す。而して、彼等の表情から遮二無二われわれも又同じものを感じさせられる。そしてそれこそは、作者写楽が已に百二十年前に感じた。而して、^{〔異〕}今もなまへしい驚畏である。

文調、春章、春英、春好の細絵には、興味のあるものが多い。春章、春英、春好と階段的の推移はあるとしても、これは時代的な漸進的な推移であるように思はれる。例へれば、ギリシャからローマへの推移にも比較されるかも知れない。而して、必然、春章が一番いい。そこへ行くと、時代も一番古く、比較的単純のようには見えるけれども、文調のものは、余程個性的な表はれがある。

清長の美人は、或人々がむやみとほめる程よいとは思はない。

此の上は、広重の代表的なものを少しと、北斎の風景、静物スケッチ、殊にあの恐ろしく壮快な涛の絵が見せてほしい。

^{〔欄外に記す〕}
くもりなきかがみにむかふ ふじびたひ 月のまへぐし 雪のおしろひ]

二十七日 sunday

雨、曇、時々晴。

午後、家のものが皆出てしまったので、田辺サンに行く。帰り、二七の縁日¹⁸⁸⁾に行つて、お人形を二つかつて来る。

二十八日

晴れ。学校から帰ってから、野間の告別式にいつて来る。――

×―――×

机上の懐中時計は九時を指す

白い夏の雲が後から後から飛んだ

快晴の空に

何時どんなにして水がたまって――

いや、気まぐれな此の頃の天気では仕方もあるまい

冷やかな風が闇の夜に

窓外の樹の葉をさらへと鳴らせたが

ばらばらと

台所のトタン屋根がはじけ返ったと思ふと

後は只、ザーッと

轟くように雨

又雨だ

女中が乾し忘れた洗濯物を取り込もうと

あたふたとおもてに駆け出す
時計の針が二十秒廻って
女中が台所に逃げ帰った時は
もう、雨もない、音もない
それも、此の頃の執念深い忘れっぽい天気なら
仕方もあるまいに
雲も飛んだらう
星は遠がに光るまいけれど——
闇だ闇だ
闇に又闇に静かに
雨だ
葬ひのような雨の音だ、闇だ
机上の金時計は今、九時半をさす

〔×を附す〕

六月の夜がこんなに冷えては
明日も雨にきまってゐる
禿頭の泣人形は
紫の着物に赤いネクタイ
馬鹿面の笑人形は
桃色の着物に桃色のネクタイに灰色帽

友達の若い死が
自分に新しい思想を教へてくれる
書け画け
造れ
お前は生れついたままに生きてら何うだ
お前の頭が三角のものなら
四角に見せて好かれたところで
お前の頭はつまり三角なのだ
ところで
お前が善いにしたところで
又は悪いにしたところで
それは少なくとも

お前が死んでからの価値なのだ
尤もお前が是非善くならうとならば
わけもない
若くて死ぬがいい
だと云って、此の意味は
三角と四角には、何のかかはりもないことだ
俺が骨になるまでに云ふことは
まづこれだけで沢山のようにだ
外では雨に降られて風がなき
壁では写楽の市川八百蔵が
東洲齋先生の影、自分の影、人間の影
幽霊をみつけて驚いて居る
六月の夜がこんなに冷えては
明日も雨にきまってる

[×を附す]

二十九日

初夏の夕の窓辺を吹く緑の風である
西の空は明るく黄ばんで
樹々の薄葉もさらさらと
心もち甘へてみたい緑である
街では子供達が集まって
久々のよい夕を——二十日の雨の後のよい夕を
腹のへるのも忘れて遊ぶ
急に一人がわれるように泣きたて、
それが直ぐに泣き笑ひにうつって
他の子供達と一緒にののしりあって
再び明るい初夏の夕の街の
子供達の楽しい集ひに溶ける
殉情の子供達は泣いても笑っても
そんな小さな怒りや卑みの為に
彼等の楽しい夕を犠牲にしない
そんなにありふれた心ではあるけれども
例へば誰でもが持つ過去のように
只殉情の殉情の

初夏の夕の窓辺を吹く緑の風である

[×を附す]

三十日

幸なことに

世の中はあられもない嘘の塊だ

嘘は親切で、優雅で

嘘は正直で、嘘は真実だ

幸なことに

世の中はあられもない嘘の塊だ

世の中は死んだ人にも、神にさへも

教へられた嘘を平気で口に出すので

世の中は気楽で安心だ

幸なことに

人々は何うにも動かせない真実の塊だ

嘘をつく心は真実で

嘘を嘘と感ずるのも真実だ

幸なことに

人々は何うにも動かない真実の塊だ

皆が皆教へられた嘘の中に

平気で真実をぶち撒くので

人々はお互に間違ふことがない

[×を附す]

曇り。夕方から雨。

学校のかへり、野崎が遊びに来る。

○ ————— ○

心の奥に蟠る癖がある

私自身にすら、只一度

顔さへ見せたことがないので

私はその存在を堅く信じて居る

それは恋人のように用心深く

恋人のように意地悪で

恋人のようになまめかしい影だ

それ故私は人に対しては最も用心深く
人に対しては最も意地悪で
人に対しては最も臆病な弱虫だ

或る時ピエローがこんなことを云って居た
「坊ちゃん方や嬢ちゃん方
おっとおあいにくさま
今日は此の通り泣きませんよ
あなたがたは私の顔さへ見れば
挨拶のかはりででもあるように
ほれまた白い泣き虫が来たなどとおっしゃいます
それは私は正直に申しませば
泣き虫とお呼び下さることに
反対しやう気などゆめゆめ持ちません
それを悲しみもしませんし
それを恨めしくも思ひません
わけは斯うでございます
秋の朝風がずっと快く身にしみますと
わたくしは何故ともなく悲しくなって
知らずに涙が出るのでございます
色とりどりに美しく飾られた
春の野に山に出ますれば
其処にも私はすぐに
何故ともない悲しみを見つけてしまひます
つまり又泣くのでございます
それからあなたがたは
私が泣いて居る最中に
笑ひ出すのにお気づきになって
不思議さうな顔をなさいますが
ね、私には【何故ともないもの】が
決して不思議とも何とも思はれないのでございます
それは私の裏に住む必然なのです
私自身にも気づかれない癖なのです……」

それだからとて

私は私自身に対しては斯んなに優しく
斯んなに親切で、こんなに正直なのだ
心の奥に蟠る癖がある
私自身にすら、只一度
顔さへ見せたことがないので
私はその存在を堅く信じて居る

〔×を附す〕

三十一日

曇，午後雨。

祖父出京。〔中井〕惣ちゃんが遊びに来て，夜九時過ぎまで話して行った。

六月

一日

江波と，中島のうちに行く

二日

夜，報知講堂に，わかもの座¹⁸⁹⁾の試演を見に行く。ストロンドベルヒのパリアとサムーンである。

三日 Sunday

晴れ。江波兄弟三人，中島三人，〔兼俊カ〕野崎と自然園¹⁹⁰⁾に行く。後から母と弟と荒川サンの姉弟妹三人が来る。半日を労れるまで遊んで帰ると，お玉サンが来る。直矢叔父様の処から電報が来る。「アイコ ヤマイ ワルシ スグコイ」。明日の特急で母が出かけるだらう。

四日

晴れ〜しい半日の後。又々怪しげな黙り込んだ午後が続いたが。幸ひ夕は再び夕映の赤い美しい空となる。全く何日ぶりか。自分は夕食後。少しはくつろいだ気持ちで一時間程も街を散歩する。辻々には又そここの露路〔路地〕には。子供等が，若いお上サン達が出集って。鬼ごっこやじゃんけんとびにうち興じ。又晴々しい顔で赤子等をあやしてたてる。

何処を往っても緑が。緑が爽やかな諧調を作る。つひ春先までは，同じ緑が。只，萌え出ようとする勢の影になって居た緑が。今は出来上った。丁度，早くも遅くもない，

出来上った緑の感じを投げる。

アルウキンさんの門前を通ると、門内の花壇に。とりどりの美しい花が咲き競って居るのを。羨ましく眺め入って、桃華園の前に出たので。吸ひつけられるように中に入っ
て。沢山の蕾をつけた白のアンジャと。可愛らしいベコニアとを買って帰る。一つには、
何日の間、おしひしがれたごちない心に。優しい愛の芽を呼び戻さう悦びでもである。

永い日が薄暮れて七時に家に帰ると。妹は赤ン坊の守に勞れてか。早く床に就いて了
って居る。赤ン坊も、母の心を知ってか。優しい夕にすかさされてか。女中の背に負はれ
て静かである。母は、叔母の病気の電報に驚いて。朝の特急で忙しく呉に旅だったし。
当分は帰るまい。弟も鎌倉に行ったし。兄も一日帰らない。

鉄瓶に湯の沸る音が聞えるのも珍らしく。一人居る夕は美しい。重さうなアンジャの
大きな蕾も揺れず。可愛らしいベコニアの花は小さく紅い。

[×を附す]

六日

昨日は我慢して日記を記さなかった。併し今日は書かなければならない。

何と云ふ焦燥だ。只、有難いことには、昨日から急に暑くなったことである。外は、
射るような日が道路を真白に焼き、濃く茂った木々は埃を浴びて、風もない日向にじっ
と動かない。快い汗の中に、自分は夢みる。

仕事、散歩、夕、悦び！だが、自分はもう二日裏切られた。よし、明日こそ思ふ存
分にふるまってやる。もう用意はこれで充分である。爆発するものは爆発しなければな
らない。自分はくだらない惰性から、この苛々さを何うせ裏に隠しきることは出来ない。
而も惰性は案外に根づよく自分の心に喰ひ入って居る。こんなことも事実である。自分
は先づ手はじめに、此の焦げるような心を十人の年上の又同年の、男の又女の友達のも
とにぶち撒いてやることによつて、火繩〔ママ〕に火を点づることが出来ることを知って居る。
そして、今の自分には、それを試みよう気が既に不思議に起らない。だと云って、斯ん
な自分にいつまでも縛られて居るのは堪えられないことだ。

明日から、何んなにかして自分らしく飛びまはってやる。夏が来たのだ。自分の悦びは、
犠牲などにかまっては居られない。

七日

朝学校に行かうとして居る処へ、招待状が舞ひ込む。差出人は北大路信明、松元泰彦。
石黒九十九君が渡欧されるので、会合を催し度い。我々旧知の者達が集って、初夏の一
夕を過すのは興味深いことと思ふ、と云ったものである。全く其通りである。

石黒には永いこと会はない。鎌倉の浜で二、三年前に二、三度見かけたが、挨拶をした
だけだった。何しろ自分達が別れたのが、既に十年前のことだから。何を云って居るんだ。

そんなことは何うでもいい。兎も角、全く讚成だ。^{〔贊〕}だが、場所、東京会館、時日、六月十二日午後六時、会費六円八十銭!

だが、こんな会には、自分はまるで関係のないもののような気がする。自分は何んな着物を着て、何んな顔をして。全く滑稽だ。而して、どこに六円八十銭の金子があるのだ。

空は朝から曇って、夏とは思へないような冷え〜する風が吹いた。で、今日はよさうと思って、夕食後机の前に腰を下してみた。だが、只頭が重かった。そして、机の上にずらっと並んだ本の背文字を次ぎ〜にぼんやり見て居たけれども、何をしようとする気もなかった。やっぱり一寸でも出て来ようと思って街に出た。市ヶ谷から思ひきって笹塚まで出てしまった。笹塚についた時はもう暗かった。

^{〔雲〕}曇の多い空には、あはれな星がほんの一つ二つ霞んで居た。園ちゃんに逢って一緒に水村サンに行った。君ちゃんが一人二階に長椅子の上にねころんで居た。そして中井サンが来て居た。何か話して居たらしい。自分が上って行くと、二人は不自然に黙って居た。自分は、君ちゃんが、只ぶら〜遊んで居る位ひに思っ居た。けれど、実際は思っ居たよりも大分悪いように思はれてならなかった。

九時に帰らうとしたけれども、君ちゃんが□□□□宿って行ったら何うだと云ふので、最少し居ようと云って座り直した。是非十時まで居てくれとせがむようにして引きとめたが、又熱でも出てはいけなから、寝るようと云って、九時半に中井サンと一緒に外に出た。そして、チャンネルの方を少し歩いて、十時半に家にかへった。君ちゃんの話は、あまりまとまりがなかった。妙に人なつこくなって居た。まるでさうしなければ、私達が側から消え去って了ふとでも思ふて居るように、何でもかまはず、のべつに喋って居た。可哀さうに。

八日

皇族葬なので学校は休みだとばかり思っ居た。借金でもはらふような気持ちで、手紙をかき出した。しかし、二通書いたぎりでやめた。一つは保ちゃんに、一つは君ちゃんに。^{〔欄外に記す〕}
〔君ちゃんと保ちゃんに手紙を書く〕

気がふさいで居るので、午食後、庭に出て草をむしって居た。腰がいたくなるまでむしってから家に上って顔を洗ふと、大分さっぱりした気持ちになって、又机に向った。暫くして、惣ちゃんが学校の帰りだと云ってやって来た。夕方にはとう〜雨が降り出して、夜になっても止まない。兄さん思ひの惣ちゃん!

朝、母の処から妹に便りがあつた。愛子さんは、私達が想像して居たことを実行した

のだと、只それだけ書いてあった。皆は思はず笑ってしまった。まったく愛子さんのことを考えると、真面目な厳肅なるべき生と死とは、紙屑よりも価値のないものようである。まったく馬鹿げて居る！気の毒にも馬鹿げて居る！

九日

朝からどしゃ降りに降り続ける。一日頭が重く痛んで苛々して居る。

〔中沢〕
佑サンから妹に細々と便りがあった。それには、今度の愛子サンの事件が細かに報ぜられて居る。

〔柴山直矢〕
叔父さんの転任の為に、家を畳んで東京に引上げることになった。そして、女中をも東京につれる為に、一日親元に帰したのである。ここから事件は外面的に進展する。女中は親に、二月以来まるで給料を貰はないことをつげた。で親は、非常な驚きから怒りに変って、叔父さんの処におしかけたのである。勿論、叔父さんは毎月立派に払ひが済んで居るように聞いて居たし、そんなことになってゐようとは夢にも考へなかった——

愛子サンは、漠然と時が来たのを感じて居た。丁度前後して、愛子サンは庭で些細なはずみで怪我をした。傷は小さなものだった。併し馬鹿らしい、恐ろしい考が愛子サンに愚いたのである。而して実家に向けて、大怪我をして金が入るから、至急送って呉れるように打電したのである。時を措かず、五十円の金と一緒に見舞が来たのである。愛子サンは、実家に向けては金を受けとった、経過はいいと電報で簡単に説明した。五十円の由来を知った叔父は驚いた。直ぐに先の電報が、全く過ち（嘘）であることが実家に届いたのである——

それから、同じように諸商の払が二月以来滞って居ることが知れた。佑サンの財布の金子が二度に渡って減った。もう、愛子サンは心と云ふものを失ったのである——

水交社の一室で、叔父サンと佑サンとの交議となったのである。佑サンは、身に引受けて最後の宣告までには、まだほんの一つの道があることを説いて、一人で愛子サンの処に出かけた。愛子サンは、床に臥って居た。気分のすぐれないこと、一つには荷造りですっかり労れたこと。而して、床の上に座ったまゝ佑サンに逢った。佑サンは、愛子サンに向って、自分は誓って悪いようにはとりはからはない。只正直に言って呉れ、静かな心で只有ったままを言って呉れるように諭し始めた。併し愛子サンは憤然として、総てを否定してしまつた。「自分はミッションスクールを出た信者である。心には少しでもやましいところがない。悔恨もない。自分を信じて呉れ」と。

望は絶たれた——！佑サンは、伏いたままもう何も云はなかつた。「私もう毒を飲んで了ひましたわ。」愛子サンのこの突然の告白は電気のように、身も心もうなだれた佑サンを打ちのめした。愛子サンは消毒用の薄い昇汞水を、愛子サンの言によると、四十瓦程ものんだのである。佑サンが慌てて医者を呼ぶ為に階下に降りて、再び愛子サンの室に戻った時、愛子サンは鏡台の前で已に髪を切らうとして居た。何うしても尼になって

了ふときかないのを、やうやくのことで思ひとませることが出来た。併し愛子サンは、それからヒステリー症を起してしまった。長いこと意識も不明になってしまった――

昨年の八月十六日の日記に、自分は簡単にこう書いてある。今日は叔父様のあの悲しい結婚の日です。今日の午後二人はまるでなれへの気持で、皆からは潤ひもなく、乾いた「お目出度う」を云はれながら、三三九度の盃を取りかはしたことでせう。

午後は文ちゃんが来て居た。

十日 Sunday

朝から胸がむかへして居る。天気は悪い。降るものが降らないで、壁のように意地悪く黙った空が、自分を窒息させようとする。午後一時過ぎに、母が帰って来る。自分はどんなに母を待って居たらう。否、どんなに母が帰って来ないように願ったらう。自分は、今度の事については、一切知り度くない。もう何もかも解って居る。事件が遠くにある間は、自分は冷やかに客観することが出来た。一人の変質者が生んだ悲喜劇として、興味も持ち同情ももつことが出来た。併し事件はだんだん自分達に近づいて来る。一人の変質者が自分の意識の中で、自分の一人の叔母に変わって来る。

遂に事件は自分にまとも面接して来る。而して自分の前に、二人称として、対称として迫って来ると同時に、自分は必然客観から離れて、主観の方に引摺られて来る。自分は知り度くない！ 而も自分は決して自分からきき出すことはしなかったとは云へ、母の話の少しでも聞き漏らすまいとして居る。全く馬鹿馬鹿しい。

一こと聞く度に、自分の中には、嫌悪がめきへ育って行く。一こと知る度に、自分は一切知り度くなくなる。そして、其の為に益々自分は母の言葉に耳を傾けるのである。全く馬鹿馬鹿しい！

悲劇的な^{〔事実〕}実事は、益々滑稽なものになって了ふ。喜劇的な事状は、堪らない嫌悪を生み出すばかりである。馬鹿！ 自分はもう前から一切のことを知って居たのだ！！

滑稽な例がある。愛子サンの盗みに就いて、気の小さい馬鹿の兄さんが、おづへと聞きただした時、愛子サンは紅くなって、紫色になって、拳をにぎって歯をくひしばって、顫えて口惜しがった。それは、全く正直で真実で、総べての同情を注ぐべき光景だった。

そして五分後に、穂積の姉さんが優しく、けれど巧にきき出した時、愛子サンはまともにも逐一白状してしまったのである。直ぐ後に、当の佑さんが帰って来た時、そんなことは既に全く忘れて居た！

愛子サンは、皆が病人扱ひして何も云はなくなった今、はしゃぎきって毎日枕下に蓄

音機をかけさせて笑って居る。

自分は一番苦々しい役目をつとめながら、皆からの憎みを一身に浴びて、一人で決定的な終結をつけてくれた穂積の姉サンに感謝する。

日暮からとうとう雨が降り出して、冷たい風が吹く。

十一日

君ちゃんから長い長い、かき乱れた手紙が届いた。それが一日漠然と自分を虜にしてしまふ。其上、天気は曇って曇って、自分を圧へつけて了ふ。

十二日

自分は夜なかに目を覚ました
軀ぢう蚤が這ひ廻り
ぶんぶんと蚊が顔や手を取巻いてゐる
けれど蚤など一匹でも居はしなかった
自分はぐっしょり汗をかいてゐた
枕もとの時計は二時をさす
自分は起き上って十本程も、束にして
蚊やり線香を焚いて
それから便所に行って
窓の外を眺めた
外は薄明く澄み渡って
死人のように黙って動かない
自分は夜半にも白い、冷たい霧を
腹の底まで吸ひ込んだ
全く静かである
自分は高い梢から木の葉に落ちた
一雫の露を聞いた
静けさの中に
その、われるような雫を聞いて
顫え上って、床に帰った
隣室に鉄瓶の湯が沸るのも
全くの静けさである
遠く、遠くの方で

ゴッ、ゴッ、と汽車が鳴って
又沈黙が続いた
自分はそっと目を閉ちてゐた
けれど心では次の、その次の
恐ろしい声を待ち恐れた
突然
鋭い叫びを、せつない一声を
夜鳥が叫んだ
自分は沈黙の中に顫え上った
ぱっちり瞳を開いて
そっとあたりを見廻した
鉄瓶の湯が沸る
自分は腹這ひになって
枕もとの手帳と鉛筆とを取った
何事をか書きつけようとしてみたのである
だが自分は其時
鉛筆を投げ出して、そのまゝ頭を垂れた
鉄瓶の湯が沸る静けさである
——俺は不幸な奴だな——
わけもなく自分にむかって声を立てた
沈黙の中に自分で其の声を聞いて
顫え上って夜具を引寄せた
それから……考へが飛んだ
女友達の不思議な病が気になった
彼女の長い長い手紙が胸をえぐった
それは身に覚えのない因果の、罪惡の
底しれぬ復讐である
それから、年下の叔母の自殺未遂が
自分に限ない侮蔑と憎しみを植ゑる
それは自分の衷なる痴愚の
嘲笑であり、羞耻である
それから……
鉄瓶の湯が沸る
——俺は不幸な奴だな……
だが、まあいい

他人の不幸と云ふやつが
時に自分を救ってくれるように
此の俺の不幸が、或は
誰れかを救ふこともあるだらう——
蚊やり香のきついにほひの中に
鉄瓶の湯の沸る静けさの中に
自分の頭は重く重く痛んでゆく

[×を附す]

倉沢に手伝って貰って、石膏に色づけして居たら（江波、三沢、竹田も来て居た）、小山から電話で、石黒の送別会に人が集らないので、芝の三縁亭¹⁹¹⁾ である事に変へたから来てくれとの事だった。後^{〔遅〕}れて行くことを約して、仕事をすませた。夕食後、遅くなって八時に三縁亭についた。丁度、食事をすませた処だった。北大路、松元、檜原、小山が来て居た。石黒は、十一年前の顔と表情とを其のまゝ持って居た。雑談の後、皆で散歩に出た。

^{〔芝〕}公園をぬけて、銀座に出るまで、石黒と自分は喋りつづけた。石黒は（よく自分がやるように）あらゆる彼自身を自分の前にさらけ出した。出来るだけさらけさらけ出した。そんな人間になって居た。自分は余程、石黒の興味を引いたらしい。自分も又、石黒に対しては十一年の隔りを少しも感じない程、愉快に話すことが出来た。

十三日

今日からもう学校を休む。倉沢が朝から来て、昨日の続きをやってくれる。午から一緒に一寸学校に行つて、そのまゝ自分は笹塚に行く。君ちゃんとの全く訳の解らない会話を物足りなく思ふ。晩には、山口サンに行つて、遅く君ちゃんの所に宿る。

十四日

午後、宇多ちゃんと君ちゃんと三人で守山公園に行く。惣ちゃんが来ていたので、一緒に夕方帰る。

十五日

自分は勞れて居る
身も心もげっそり勞れて居る
蚊蜻蛉が弱々しく飛んで
さて、何処へとまらうともせず

何もない黄色い壁に
盲者のように遮二無二ぶつかる
勿論壁は決して答へない
而して運命も亦
決して自分に答へようとはしないのである
何と云ふ残忍か
自分が悪いならば擲られてもいい
自分が弱いならば殺されてもかまはない
自分は蚊蜻蛉のように勞れて居る
自分は今一つの答を待つ為に
(それは自分の頭を千のかけらに砕くものでもよい
それは自分の魂を底知れぬ火の海に投げるものでもかまはない)
自分は今一つの答を得る為に
身も心もげっそり勞れて居る

おゝ、さなくばバンドーラよ
貴様の手箱に呪はしくも最後まで残ったものを
世の外に抛り出してしまへ!

[×を附す]

十六日

朝から晩まで降る。

見給へ、僕は此の通り元気さ
ただ、毎日毎日
げじげじよりも悪い雨が降るばかりさ
誰だつて癩せようぢゃないか
だが彼女が帰って来てくれさへすれば
一寸待ち給へ、僕の恋人を〔紹介〕照会するよ
ぎらぎらする白い雲に
焼ける土
蒸すような惱ましい快い倦怠
それを生む太陽!
おゝ、恋人よ恋人よ
お前が居ないので

私は毎日こんなに顫えてゐる！

[×を附す]

十七日 Sunday

おゝおゝ、何と云ふ卑屈な片意地だ
朝から晩までまるで一日
楽しい爽々しい書齋ではなくて
無為の焦燥に自分を縛りつけ
其上寒くぼたぼたと
まるで無関心な単調を以て
弱々しくけれど意地悪く
直接自分の心臓を萎へしめる雨
何日の間自分の体は確かに
いま――しい青かびの中に埋もれた思ひである
何日の間自分の頭の中は
風もなく少しの空気すらゆるがないのに
ぼろぼろとかけてこぼれる
乾いた砂山か、それどころか
狂じみて、或はもっともっと悪く
殆ど馬鹿になって居る

[×を附す]

明日も雨々

全くだ！ 馬鹿!!!

一週間でも二十日でも
雨の降る間寝ることにしたら
こんなに怒らないですむかもしれない
[欄外に多数記す]
[雨 雨 雨 雨 雨 雨 雨 雨 雨 雨 雨 雨 雨 雨 雨]



1923年6月17日のスケッチ (第3冊・60頁)

十八日

あるお天気のよい日に
大事なアンジャが枯れました。

一日私が喜びに顫えて
勇みたって街を歩き
友を呼び
ほほ笑んで
快く汗ばんだ腕をたたいて
「とうとう夏はやって来たよ
来て見れば、もう
約束に遅れたことなど、まるで
咎める気もなく歓待するのさ」
土は焼けて来たし
(だが、蚊はぶん〜鳴くだらうけれど)
緑が濃くなって

草いきれが快く感官にしみて
流れるような汗の中に
仕事はどんどんはかどるだらう

そんなお天気の良い日に
大事なアンジャが枯れました

[×を附す]

十九日
何だって？
木になって居る林檎は美しく
手にとった林檎はすっぱい？

だけど
あの林檎は美しいかも知れないが
それが何うしたんだ
こっちのやつはすっぱくっても何でも
何と云っても俺のものだからな

[×を附す]

こんなことをあなたにきいていいかしら
あなたは今誰かを恋して居ますか
何故とって、私は自分で自分が
斯うも毎日退屈がってるわけが解らないのです

[×を附す]

ふっくらとした
赤い大きなクッションに身を埋めて
ほどよい渋を持った
新らしいサラサの壁掛を背景に
さてこれから
禿頭の泣人形と
灰色帽の馬鹿人形の芝居が

私の白い机の上で初^{〔始〕}まらうと云ふのです

「泣人形さん、

まあまあ、それはお年のせゐもあろうけれども
お前さんのその渋い顔は何うしたと云ふのです。」

「なんだお前か、わしの隣りに突立って居たのは。
だがお前は、わしの顔が一体何うだと云ふのだ。」

「お前さん、そんなにおどかさないで下さい

まあまあ、そんな風に云はないでも。

何とか外に、もう少し優しく云へないものでせうか。」

「さうかな、ではこれでは怖くていけないと云ふのだね

だが、わしは、わしの此の顔は

永い永い過去のわしの所有経験が導いた

わしの貴い苦難の哲学の最も直接な現はれで

わしは私かにわしの此の顔を誇ってもいいと思つてゐるのだ。」

「おやおや、私はさっきから

あまりおどかして下さらないようお願いして居るんではありませんか。何うかそんな突飛な思いつきで

私をからかはないで、もう少し解りやすく……」

「馬鹿！ わしに此の上もつと真面目になれとでも云ふのか。

お前のそのいやらしい笑ひこそ少しは慎んだがいい。」

「とんでもない。ではあなたはそれで真面目だと云ふのですか。

おや――まるで狂人だ。

へへ、では申し上げますが、私の此の笑ひは、へへ

その私の、その過去の経験が、へへ

私の大悟の哲学のその現はれで、へへ

その私が誇つてもよいかと思ふ、その

へへ……」

私はさっきから此の

まるで意外に進展する芝居を

至極真面目で

殆ど恐れさへして見て居るのですが

おやおや

向ふのメフィストフェレスのうすら笑ひが

此の芝居を一層

無気味な恐ろしいものにします
誰か早く幕を閉じて下さい

[×を附す]

二十日

夕食後、散歩がてら小山を訪ねたら、偶然甘露寺が来たので、九時頃まで遊んで居た。

二十一日

お前は何故
斯くも一般感情の悪い日に
而もこんな処に出かけて来たのか
見ろ、雨はだらしなく降り出したし
女中達までが
お前をふり向うとはしないではないか
だと云って私は傘もなければ
高下駄もないのです

其故、お前は馬鹿なのだ
お前が馬鹿な夢に
いつまでもかじりついて居る姿を
心ある人は何んなに晒って居るか

だから私は後悔して居ます

馬鹿を云へ
お前の後悔が何んなものだか
俺はよく知って居る
お前の弱点は
お前自身をかいかぶって居ることだ

私は私自身を
立派に正当に解釈して居るつもりですが

俺はお前の考へが

間違っ居るとは云はない
俺は世間が、人間が
そんなものではないと云って居るのだ
見ろ、お前の信頼して居る身内だと云って
一度だって彼女自身の為に
お前を省みたことがあるか
反対に彼女自身の為にこそ
時たまお前を弄ぶのだ

ですがあなただって
私がこのまゝ黙って帰ることが出来ないことは
よく御存じの筈です

さうだ、だからお前には同情して居る
それに自然までが
お前に反対するのだからな

私はそれらについては
別段の感情を持ちませんよ

それがお前の敗惜みでなければいいが
只、お前はお前自身が
自然に対しては何れほど力ないものだからを
うすうす知って居るのだ

さうかも知れませんが
何故なら私は少しも怒る気はありませんから
其上、私は彼女等に対してすら
そんな気がして居るのです

いや、お前もいぢけたものだ

ですが私は虐げられることが
不名誉だとも
耻だとも思はないのです

却て人間は彼自身に対する時のみ
その価値を主張し得るのではないでせうか

さうかも知れないさ
お前のようなものにとってはな

ですがこれだけは私が白状します
今日予感
お互に正しかったのだと

よろしい、だがこれだけは
お前も知って置くがよい
お前が慰められようと思ふ時には
他人も亦同じ心に苛立って居るのだと
それから若しもお前が
昨日の事を思ひ出して
ほんの偶然を頼んだのだったなら
お前も人がよすぎるよ

[×を附す]

二十二日
雨降りて、降りて
日毎に
たれこめれば
枇杷の実の黄ばむ姿を
つくづくとし
こたびは

[×を附す]

颯風襲来。日暮になって、全く美しい蒼空を見ることが出来、風も静まったが、夜に入って又幾らか風が吹く

二十三日
〔本田〕
讓二叔父様が突然来られて、一緒に午後鎌倉に来る。

嵐の後らしく、蒼空にはもくもくと白い雲がかかって居る。エメラルド色の水の層を浮かせて、アメの様に腐ったお堀の水は、昨日のどしゃ降り〔筋〕で土色に気持よく濁ってごったがへして居る。

汽車から見る景色は、待つて居た様な田植の娘等である。鎌倉の夕の空は千の色に輝き、富士山の頂が黒黒と描かれて居る。而して夜は、夜は、深い空に半月が、而して数少ない、併し見つめる様な星が青い。

二十四日 sunday

そんなに明るい、そんなに静かな——

そんな沈黙の朝

自分は白い谷百合の花を手折って

なまなましい木札の立てられた

新しい小さい彼の墓を訪ねたのだ

さんさんと降るような光

有らゆる緑の諧調の中に

盛り上った輝やかな青苔の互え

宝石色の空気を透して

さんさんと降るような朝の光である

浄らかに掃き清められた古寺の庭は

千年の杉の樹立に抱かれ

あじさゝの紫

古いかいどうの緑の蔭の静けさ

山門の虹梁にクククと

クククと

家ばとが睦みごとかはす静けさである

これはまた

山蔭のみ堂の明るい聖い沈黙である

色褪せた象形の木鼻の上に

子雀がチチと親を待ち

樹から樹へ鴨鳥が渡りゆく沈黙である

そんなに明るい、そんなに静かな——

そんな沈黙の朝

自分は白い谷百合の花をとほして

なまなましい、小さい木札となった
新らしい、併しまことの彼を知ったのだった¹⁹²⁾

[×を附す]

梅子叔母様の処に出かけて昼食を食って、湯を浴びて、帰った時は、輝くような日が、
重い労れのような雲となって空を被て居た。

祖父様と譲二叔父様とは、大船の東郷の伯父様¹⁹³⁾の処に行かれ、晩に帰られた。

月にほのか 床の白百合や 蚊やり香

二十五日

空には灰色の厚い雲が渦巻いては居るけれど
何処かにきらぎらと強い日を潜めて居る
而して自分はやみ難い父の墓参を思ひ立って居たので
心は晴れ晴れと輝いて居る。

駐車場で車を待つ間に

自分はG女を認める。而して意外な為に
自分がG女を確とたしかめようにする時
自分は又Iを彼女と共に認める
こんな美しい心を先づここで汚されようとは！
それ故自分は二人に対しては
遠くからの流し目を以て挨拶にかへる
それから……

自分は車を降りると先づ

懐かしい土をしっかりと踏む
シグナルの一つにも、そこに働く工夫、駅夫等の
一人一人にも自分の心は引かれる
それから……

街道にさしかかる

古い松並木の街道には人足もなく
道の両側には白い野ばらが何処までも続く
自分は其の野ばらに降る露の一つ一つに
五年前の自分の姿を懐しく見る

それから……

田圃道に出る

降りつゞいた霖雨と

最後の暴風雨の後の此の静かな日

広い田の面には忙しげに三人五人

苗田の苗をぬいてからげるもの

一ばいに水をたたへた泥田を耕やすもの

耕やした田に綺麗に植ゑつけてゆくもの

男も女も、爺さんも娘も

なべて盲人と足なへでないもの等は

此の静かな日、此処に出て

冗談も交へて

忙がしくけれど楽しく働いて居る

そこのあぜ道に婆さんと娘とが

大きなむすびをひろげ

ここの水たまりに子供達がじゃぶじゃぶと小魚を追ふ

自分は礼拝の心を以て

併し明るい心を以て細い一本道をゆく

自分は彼等の仕事と身振や言葉に対して

好奇の目を耳を以てする無礼を避ける

それから……

此の広い田圃の真中に父の墓がある

併し自分は胸までもある藪草を

身を以てかきわけねばならなかった

そしてその藪草の中に父の墓がある

今自分の前に五年の過去が一時に展開して

雨のような風のような

渦巻のような併し静かな思ひである

そしてこの過去の中に、この思の中に父の墓がある

そして今自分の心は

あゝ、いつものように爽かに空である

それから……

自分はまた遠く田圃道を歩く

遠く離れた処に爺さんが一人

泥水に膝まで埋めて耕やして居る

——何時になりましたね——
——十二時を十分まはりました——
——どれお昼でもつかふかな——
自分は礼拝の心でちっと立って居る
——あんた等の喰ひしろはこうやって出来るだよ、ハッハッ
併し爺さんは心からさう云っただけだった
自分にはこんなにも正直な心を
まともに誉め上げることは出来なかった
——だがあんたらが思ふよう辛かあねえ
こんな仕事は辛くっちゃ出来ねえことだ
なに全く楽しみよ
皆がさわぐ時や一緒にさわいで
それでいいのよ
たんと面白えだ——
それから……
自分はまた懐かしい海を見なければならぬ
畑中には見慣れない新しい家が幾つか立った
けれど夏にはまだ早いので
あたりはひっそりとして居る
道にはまだそこここに水たまりが残って居り
月見草が赤く萎んで居る
そして海は……
海は静かで
広い砂丘は何処までも何処までも
浜草の浅い緑をひろげて霞み
竜神の祠も昔のまゝに古びて居る
遠く遠く、珍らしく
石油発動機船が、トットットットと
鈍く、忘れたような過去の追憶をゆりさます……

[×を附す]

二十六日

✓いたつきの 身にはも辛し 真日明く 静かなる朝と 朝の目覚めは
✓しんしんと 深き静もり 向つ山 山の背のあたり 鳩の群飛ぶ

[一行半末梢]

快晴，涼風。

午後，讓二叔父様は東京に帰られ，晩には母上が来られる。

二十七日

あゝ，雨が，雨がまたまた降り出す。

併し，やがて篠つくように，やけくそに降り立てると，心は却って軽くなる。

昼間のうち，梅子叔母様の処に行き，晩，母上と東京に帰る

二十八日

不愉快，不愉快，不愉快，不愉快!!

二十九日

快晴。午後，倉沢が訪ねて来る。

晩は，有楽座に長唄研精会を聴く。

三十日

狂気のような天気である。

美しく晴れた朝が，風と共に曇って，雨をたたきつけて静かになって，からかふようにばらへ〜と降って，其頃から笹塚に一寸出かけて，夕方かへると，夜に入っておさまったらしく，併し静かな雨がもう止まないように降り出す。

電燈が力なくともって

更紗の壁掛に白い蛾がとまって

赤い蛾がとまって

かなぶんがとまって

羽蟻がなめずりまはって

蚊とんぼがぶつかってぶつかって

空気は硝子のように動かない

外は雨の音が鬱陶しく

闇はなまぬるく

崖下から

ぼろんぼろんの三味線が聞え

そして俺は
俺がしかつ面^{〔め脱カ〕}をして居るのを知って居る！

[×を附す]

七月

一日 sunday

✓霧雨に 淋しく紅き 葵なり おほば
祖母の君の 二度のいみびを

園には

百千の花、咲きあへり

曇日のもと

淋しくも華やかに

百千の花は咲きあへり

ありし日の

おほば
祖母の君の

姿し、思ふべく

[×を附す]

〔柴山琴子〕
祖母の命日なので、午後から母と鎌倉に行く。譲二叔父様も来て居られたし、昌道、百合子も来てさわいで居た。晩には、梅子叔母様も一寸来られる。夜九時五十分の汽車で帰ると、文ちゃんが来て居た。

霧雨が降ったり止んだりして居たが、晩東京に帰った頃から、雨がひどくなって来る。

二日

一雨、二雨……

〔クチナシ〕
そして、梔子の花が真白に咲きました

随分きつい馨ですが

私には忘れられない思ひの花です

梔子の花の白さは

私の思出の中の唯一つ

紫の夕の静けさに浮ぶ
少女の優しい瞳に似ます

つまりは許されない思ひを
儂くも思ひ合った心に似ます

忘れませうと心にもなく笑みかはした
悲しい別れの言葉に似ます

一雨、二雨……
そして梔子の花が高く馨ります

[×を附す]

天気はめいりそうである。それでも朝のうちは、兄にオブリカートをつけて貰って、久しぶりで歌など歌ったが、午後はもう何にも堪えられない。寝ることも出来ず、起きて居るのにも堪えられない。

三日

終日、鬱陶しく雨が降って寒い。中島が遊びに来る。
祖父様、讓二叔父様出京。叔父様は直きに帰られる。

蛇苺

雨が降る降る

蛇苺

しとしと雨に
ながあめ
霖雨に

古いもみじの下蔭に

草かげに

赤い実の

蛇苺

雨がふるふる

蛇苺



雨の日の自像

馬鹿!

ここに夢がある
うしろに運命が居る
そして自分は自由だ

夢は意志を待って居る
而も運命は亦自由である
それ故自分は戦だ! 気違ひだ!

四日
天気晴朗

五日

朝から曇っていやな日だったが、画きかけて居た油を一枚、朝のうちに仕上げる。倉の中から古いぼろへに金箔〔はか〕のけげたような額縁をひきづり出して、漆をぬったり、油絵具をぬったりして、兎も角もつかへるような額を二つ作る。

午後からは、又雨になる。そして、寒い。

六日

第一に今日は、金曜日である

そして此の金曜日が

何んな風に自分を弄んだか!

全く自分はほんの一塊の砂糖で

ニコニコとたわいなく笑ふ子供のように

ふとその砂糖が口の中に消えたのを知って

再び涙もなく泣きわめく子供のように

さうだ! 全く子供のように

自分は此の気まぐれな天気

からかはれ、打ちのめされたのである

だがそんなことはどうでもいい

自分は勞れて居る。勿論天候はよくない。自然は絶体〔對〕によくない。

併しもっと悪いことに仕事が出来ない

あゝ、今の自分にほんの二三十円の金があったなら! だがそんなものが何うしても駄目ならば人間、ほんのつまらない一人の人間が居てほしい。併し、彼は第一に自分を心から笑はせて呉れなければならない。全く自分は笑はない。さなくば、誰れもが決して自分にかまひつけずに、

われるように自分を泣かして呉れればいいのに! 全く自分はもう久しく泣かない。

なまぬるい慰めは、自分を殺して了ふ

七日

今日も又、気まぐれな天気が自分を不快にする。冬のような雨が午に漸く晴れると、夏とは思へない寒い風が吹く。だが勞れて居るのは、頭や感情ばかりではない。まるで体は置き処がないもののようにぐんにやりして居る。

夕食後、神楽坂を通過して海野¹⁹⁴⁾の処を訪ねたが、留守だったので、田辺サンに行く。神楽坂も二七の縁日も、ひどく賑はって居る。

深い空には、星が沢山に輝いたが、七月の夜はまるで冬のように寒い。



禿頭の泣人形の自像（着彩）

八日 sunday

晴，雨，晴，曇，——小雨。

十一時が十二時になって、中嶋と宮崎にモデルを定めに行く。目白に行って、佐伯¹⁹⁵⁾と話しこんで居て、夕方帰る。佐伯と二人で二時間も喋ったことは始めてだったけれども、自分は少しも退屈しなかった。帰ったら湯地から電話だったと云ふので、問ひ合はせたら、これから行くと云ふので待った。湯地も亦十時半まで自分を退屈させない。

愈々明日から仕事が出来るらしい。

もう長いこと私の興味から離れつゝ、あった——併し最近、多分、泉の四月号に出て居た「骨」と云ふ小さな小説で、再び興味を一寸ひきおこして呉れては居たけれども——

有嶋武郎¹⁹⁶⁾氏の自殺は、自分を驚かせたと云ふより、喜ばせて呉れたのかもしれない。勿論、自殺したことが、ではない。

有嶋氏は、長いこと、対社会的に自身の財産、特種な階級やに就いて苦しんで居たらしい。そして、それが長いこと私の興味をそいで来たのである。併し有嶋氏は、結局詩人だった（行きつまった処に、詩のあるのは常ではあるけれども）。即ち有嶋氏が私の興味から離れつゝあったことは、恐らくは有嶋氏自身、馳られ遂ひやられた——何処かで退屈しきって居たに違ひないのに！——対社会的な、遠心的に自己を扱はねばならなかった処の、そんな有嶋氏の環境であったのである。奥さんをなくなった大きな悲しみが、ホイットマンを愛読されたセンチメンタリズムが、人のいい有嶋氏をかって、論理的な道徳に導いて来たことは、至極当然のようである。而もそれが私には興ないことだったのだ。

だが、最後の一闪に於て、有嶋氏は再び「人間」に帰って来た。例へ有嶋氏の死は、遠心的な対社会的な——（全く有嶋氏が今迄長い間、社会的置位としての有嶋家の嗣子として、苦しみおほせて来たことは不思議である）——論理思索とその実行に対するお詫びのように見えるとは云へ。

とまれ私はあまり絶対的な立場から見過ぎたようである。私は実際の処、有嶋氏位偉い人を知らないのである。

〔欄外に記す〕
[小さき者へ、宣言、カインの末裔、或る女]

九日

嵐めく風雨の中を、午に目白に行く。暫らくすると、霽れて静かになる。而して蒸々して来る。

モデルもやって来て、五時まで仕事をして帰る。

十日

此の静かな朝

嵐がゆき過ぎて

今、此の静かな朝

快い頬摺を以て輝かしい朝が

朝の光が、窓辺に寄ります

私の部屋の総て——

本箱にぎっしりつまった本も

今、光に洗はれて

花のように高く香ります

私は人なつこい眼をあげて
私の人形を愛し
象眼の銅壺を愛し
柿の実の、緑の蔭の
優しい小さな碧空の
そよ風の、光の
私の小さな眺めを愛します

おゝ、そして斯んな朝
弟の部屋から
ゆるやかに流れ来る節奏——
アンダンテ・レリヂオン
それは、乱虐の嵐の後の喜びです
喜びは祈りです
憂鬱の青い思想——
長い幾日の叛逆から醒めた
明るい心です、光です

おゝ、斯んな静かな朝
私は人なつこい眼を上げて
私の人形を愛し
書籍等を、壺を愛し
窓辺の小さな眺めを愛し
友を思ひ、人を愛し
事の外、私自身を懐かしく可愛く思ひます
おゝ、こんな静かな朝に

[×を附す]

且の心は今何処にあるのか。午には空はすっかり曇って、雨が降り出し、三時四時にはどしゃ降りに降り荒れ、併し幸ひ又仕事を終へて帰る頃には、雨が止んで居た。



ウイスキー瓶のカット

[大入袋貼付]

